

クイーンズランド州ヨーク岬における言語復活と維持

The Revival and Maintenance of Languages in Cape York, Queensland

濱嶋 聡

Satoshi Hamashima

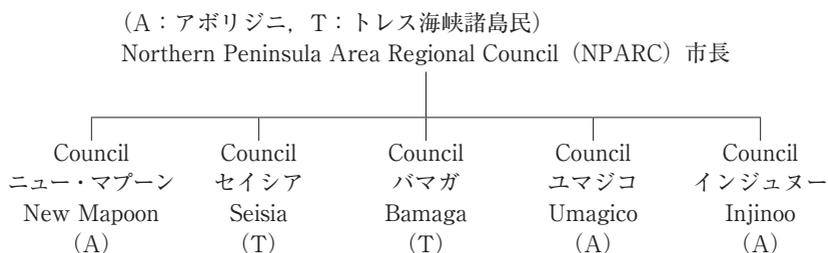
はじめに

まず、トレス海峡とは、オーストラリア本土とパプア・ニューギニアを隔てている約160キロに及ぶ海峡で、約8000年前までは、陸橋がヨーク岬とパプア・ニューギニアを繋ぎ、人々は自由に移動することができた。しかし、徐々にアラフラ海とオーストラリア北東部の珊瑚海の海面が上昇し、陸地のほとんどが水没し、現在残っているのは、散在する島々と、珊瑚礁、海中に隠れた岩、そして絶えず形を変える砂州である。トレス海峡は、多くの国の船が行きかう極めて重要な交易ルートで、安全な航海のためにかつては全ての船に航路を知り尽くした水先案内人が乗船していた。この地域の人々は、オーストラリアのもう一つの先住民で、トレス海峡諸島民と呼ばれ、本土のアボリジニとは異なるメラネシア人で、パプア・ニューギニア、近隣の太平洋諸島民に近い人種である¹⁾。

今回の訪問先であるバマガ (Bamaga) は、オーストラリア大陸最北端の居住地の一つで、5つのコミュニティが存在し、そのうちの2つがトレス海峡諸島民コミュニティ、3つがアボリジニ・コミュニティで、それぞれのコミュニティの要望をその代表である5名の council が市長 (アボリジニ) に報告し、市長が最終決定を下す。現在の市長は、2016年4月に選出され、任期は

2020年までの4年間である。これは他のコミュニティにおいても共通することであるが、常に問題となるのが土地に絡む補償問題である。また、教育問題、特に学校で教えるべき伝統言語の選択は、“Which Languages?”と言われるように土地問題同様、常に論争を呼んできた問題でもある。今回の調査では、トレス海峡諸島民コミュニティの一つ、バマガのアボリジニ市長宅に滞在し、各コミュニティの伝統言語復活・維持を学術的にサポートしているバマ（PAMA）言語センターのプロジェクトチームに同行した。プロジェクトの目的は、数少ない話し手である長老の話す伝統言語を録音し、記録に残し、その記録をもとに単語リスト、伝統言語による賛美歌等を作成し先住民としてのアイデンティティを維持し、コミュニティの発展に至る方向付けをすることである。本論では、前回の南オーストラリア州、都市部、アデレードにおける伝統言語ガーナ語復興・維持プロジェクトと比較して、遠隔地の先住民コミュニティが中心となったこの言語維持・復活プロジェクトがアイデンティティの維持のみならず、この地域の先住民の幸福・福利にまでどのような影響を及ぼしているのかについての考察を試みた。

表1. バマガにおける5つのコミュニティ



出典：(バマガ市長の資料より作成)

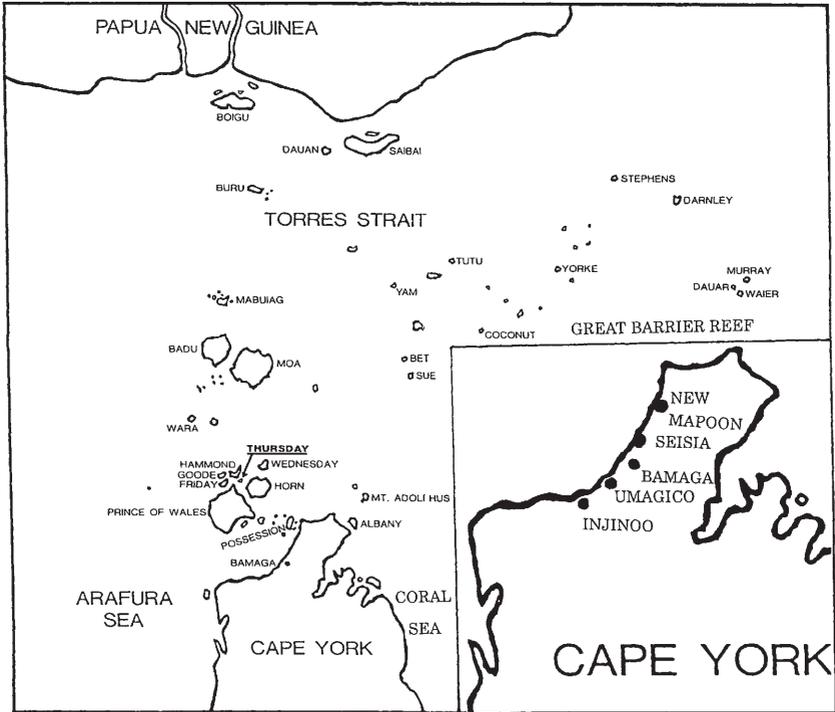


図1. トレス海峡と Northern Peninsula Area の5つのコミュニティ地図

出典：Saibai to Bamaga: the Migration from Saibai to Bamaga on the Cape York Peninsula (Dana Ober, Joe Sproats, Rick Mitchell), *The Australia Series: The Torres Strait Islanders* (VISUAL MEDIA PTY) の地図を修正、加筆。

1. トレス海峡諸島の4地域

トレス海峡は、4つの地域に分けられ西端、東部、中央、そして西部の島々、さらに海峡中央に散在する小島、砂島、珊瑚礁からなる。最大の島の一つが Saibai 島で、西端のグループに入り、この島の滑走路からはパプア・ニューギニアの海岸線を見ることができる。Saibai の人たちが自らの島をオーストラリアへの玄関と呼ぶのはこのためであるが、村は、高地の細長い土地に沿って伸び、パプア・ニューギニア本土の最短距離の村までは海を隔ててほんのわずかな距離である。このパプア・ニューギニアの隣人たちは、今でも

Saibai 島の人たちと交易を続けているが、過去においてカヌー、植物、動物、羽、太鼓などの交易は今よりもはるかに興隆していて、このパプア・ニューギニアとの関係の影響は、トレス海峡諸島民の中でも最高の踊り手といわれる Saibai 島の人たちの踊りや衣装に見て取ることができる。また、Saibai 島は、長くて狭い泥土の千潟の島であるが、雨季にはこの沼沢地は、魚、エビ、カニで満たされ、ほんの少し残された高地の内地では土壤は、熱帯果実、ヤム芋、カッサバ、カシューなどの野菜栽培に適しており、海拔が非常に低い土地のため、島民は海水からの防護のため岩の壁を築いている。また、信じられないことではあるが、パプア・ニューギニアから海を泳いで渡って来た鹿から作物を守るためのフェンスも建てられている²⁾。

Saibai 島からそれ程離れていない所に Dauan と呼ばれる泥ではなく花崗岩からなる全く異なった島がある。この島でまず目を見張るものは、花崗岩の巨礫がそびえる光景で、西端の諸島に隣接しながらも西部グループに入れられている理由はその自然構造による。島は大陸に属していてかつてはオーストラリアとパプア・ニューギニアを結び付けていた陸橋の一部で、岩だらけの山腹の麓に位置する村は、平坦地の狭くて細長い土地に沿って広がっている。島民は、勤勉で女性たちは何千年も続く昔ながらの方法でサツマイモを植える一方、トラクターで土地を耕すという新旧混合の生活を送り、伝統的文化遺産を大切に、伝統言語である Dauan Au Lagau Ya 語を話し、家族の絆も極めて強い。次に、Murray 群島であるが、この島は実際、Mer, Dauar, Waier の3島からなり、他の泥土の Saibai 島、花崗岩の Dauan 島とは異なり、Murray 群島は、熱帯性植物が生い茂る豊かな火山性土から形成され、異なる氏族からなる多くの小さな村を、島内で唯一の道路が繋いでいる。島には波止場がなく、生活必需品は平底荷船によって島に運ばれる。次に、Yorke 島であるが、この島は珊瑚礁または小島からなる中央群島の一つで、熱帯性植物の庭園のような風景が続く美しい島であるが、海産資源を利用した魚の加工工場と船舶修理を主な産業とし、仕事を求めて本土へ流れる若者を引き留め、自給自足の生活を促し、同時に島民は伝統的生活をも維持

している。最後に、多くの人がTIと呼ぶ木曜島で、西端グループに属する。この西端グループの島々は、他とは大きく異なり、下方のオーストラリア東海岸にまで及ぶ大分水嶺（グレート・ディバイディング）山脈の最北端に位置する群島である。本土のヨーク岬からほんの30キロの距離にあり、本土の地方の町レベルの生活必需品ならほとんど全てが入手できる人口約3000人の島である。トレス海峡の目と耳ともいえる戦略上非常に重要な島でもあるため、Horn島を基地とする海軍の哨戒艇や沿岸警備隊の飛行機が不法移民、麻薬の運び屋、密漁者などにも絶えず目を光らせている。木曜島は、オーストラリア最北端の町というだけでなく、最北の防衛区域でもあり、第2次大戦中は、特に日本軍の侵略に備えて島全体がオーストラリア防衛軍の管理下に置かれた。最後に、この諸島にキリスト教が伝来したのは、1870年代でキリスト教の教義が諸島民と真珠貝やニシキウズガイなどの高級貝採取業者との争いの減少に役立つものとしてロンドン宣教師協会（London Missionary Society）がクイーンズランド植民地政府の援助を受けて布教にあたった³⁾。

2. 1871年以前

ヨーロッパ人の到来までは、海峡内の物資の輸送、交通は主に他の島々の住民、パプア・ニューギア人、ヨーク岬のアボリジニ間に限られていた。諸島民は、外洋カヌーと高度な航海術を持ち、諸島、岩礁、天候、潮の干満、潮流、星と空を頼りにしての航海などに詳しかった。交易のカヌーは複数で移動し、攻撃に備えて見張りが立てられた。島内の資源が限られていたため、交易は非常に重要で、異人種間の結婚、親族関係がこれらの関係をさらに堅固にし、中央諸島民はこの交易システムで仲介人の役を果たした。ニューギニアやヨーク岬からは、道具、武具、カヌー、羽、黄土、家庭や儀式で使用する物資を入手した。興味深いことに、諸島民がニューギア人の弓矢に類似した狩猟具を所持していたにも関わらず、ヨーク岬のアボリジニの伝統生活にはそのような特徴は見られない。諸島民側からは、真珠貝、べっ甲、石具、当時定着していた諸島民間の戦いで狩られた人間の首などが提供された。伝

統的な戦いの原因に土地争いが絡むことは一度もなく、畑の作物の盗み、コミュニティの長老（リーダー）への侮辱、女性の誘拐、妖術の疑い、復讐、殺人の仕返しなどによるもので、戦いで勇敢さは高く評価された⁴⁾。

宗教、魔術、儀式、伝統が当時の諸島民の生活に大きな影響を及ぼし、特に宗教は、サメ、ワニ、ヒクイドリ、ジュゴン、犬などの動物トーテムに基づいていたが、現在でも多くの家族は、これらのトーテムを維持している。伝統的な生活では、全ての人がコミュニティでの役割、位置を知っていて、儀式のおきてを確実に遂行する義務があり、それにはタブーが付随した。社会組織は、非常に系統立てられていて複雑であった。食料資源の状況が原因で、いくつかの村コミュニティが一つの島に存在したが、それぞれの村は一つの親族からなり、それはさらに小さな血族グループに分かれ、それぞれの長老に率いられていた。尊敬、実績、年齢、社会的地位を兼ね備えた者が長老の位置に着き、彼は、警察官であり、裁判官であり、グループの代弁者でもあった。多くのコミュニティが住む島には重要なコミュニティ行事の責任者で社会的習慣、儀式が確実に遂行されたことを監督する首長が存在した。各コミュニティは、トーテムの一族、さらに宗教的カルトグループに分かれ、それぞれの指導者に率いられていた。言語的には、Kalaw Kawaw Ya 語と西端諸島の Kalaw Lagaw Ya 語が、西部諸島グループの伝統言語の変種で、Meriam Mer 語が、東部諸島の言語であるが、人々は今でもその言語を話し、録音された言語を学校で若者たちに教える努力が続けられている。西部諸島グループの言語は、オーストラリアの全先住民言語の中では3番目または4番目に多い話者を有する言語の一つでもある⁵⁾。

3. ヨーロッパ人、アジア人との接触

トレス海峡へのヨーロッパ人の移住は、基本的には19世紀後半の真珠産業の興隆とともに始まるが、諸島民はそれ以前からも様々な人種との交流を続けていた。常に、パプア・ニューギニア人、ヨーク岬のアボリジニとの伝統的取引、社会的、言語的、そして交戦といった繋がりがあった。また、中国人、

マレーシア人、インドネシア人冒険家や貿易商人たちが海峡までやって来たことも容易に想像できる。スペインとオランダは、15、16世紀の強力な海洋国であった。両国ともトレス海峡の存在は知っていたが、海峡名は、1606年、海峡を通過したかつてスペイン王に仕えていたポルトガル人船員、ルイス・パーエス・デ・トーレス (Luis Vaez de Torre) に因んでつけられた。オランダ人は、当時、インドネシアを訪れており、敵意を持ったアボリジニの存在とこの地域が商業的開発の可能性が低いことを報告し、海峡を通過することもなかった。一方、アジアと太平洋間の近道を発見した最初のヨーロッパ人となったトレス船長は、諸島民を原始的で、文化もなく未開の残酷な野蛮人と表現し、交易するに値しないとスペイン王宛ての書状で報告している。その後、1770年8月に、イギリス人、ジェームズ・クック船長がこの海峡を通過し、東と西を結ぶ航路の海図を作成し、島々のいくつかをイギリス領と宣言し、その後50年以内で、海峡は絶えず多くの船が往来する海峡となった。しかし、危険な自然環境、不十分は海図のため、多くの海難事故が発生し、生存者の多くも慣習（復讐）により海峡諸島民によって殺された。このような海峡諸島民の残忍性が大きく報じられたことに対して、ヨーロッパ人側からの島民への襲撃、殺人、作物、住居、カヌーなどの大規模な破壊が報道されることはあまりなかった。このような島民への攻撃は、19世紀後半まで続き、その時までには島民は戦いで敗北し、宗教的指導者への信頼、伝統的生活様式も無くしてしまっていた。1871年までに諸島民とヨーロッパ人の接触は、すでに250年以上続いていたが、さらなる伝統的生活の破壊は、ニシキウズガイ (trochus shell)⁶⁾、べっ甲、ナマコ採取事業開発とともに発展した真珠産業の発展と同時に始まった。それは第二次大戦まで続き、多くの資源が持ち去られ、諸島民は真珠貝、ナマコ採取・加工労働者や小型帆船の乗組員として働かされたが、労働条件は劣悪であった。このような状況から引き起こされた諸島民と真珠貝採取業者との緊張状態を安定した状態に戻すためにクイーンズランド植民地政府の援助を受けてロンドン布教協会が布教を始めたが、このようなキリスト教の布教は、結婚式、葬儀などをはじめとする諸島民の生

活を大きく変えた。その例として、Tombstone Opening と The Coming of the Light 祝祭があげられるが、前者は、人が島内に埋葬される時、本土と同様にキリスト教式の埋葬様式で行われるが、まずその人の死後を見守るための氏族のトーテムが墓の上に立てられ、その数年後に新しい墓石が立てられ、祝宴が催される。後者は、キリスト教布教団が到着した日を記念して、毎年7月1日に催される祝祭である。

クイーンズランド州政府は、州法を徹底させるために、1877年から木曜島に行政府を置き、1904年には諸島民はオーストラリア本土への出入りを完全に制限され、『先住民は文明化されねばならない』といった概念を支持するアボリジニ保護法のもとに置かれた。次に影響を与えた出来事が、第二次世界大戦で、木曜島は防衛軍の基地となり、オーストラリア軍とアメリカ軍の基地が置かれた。真珠貝採取産業のために木曜島に住んでいた日本人たちは、拘留され、木曜島の住民は他へ移され、諸島民の中には、はるか南のブリスベ



図2. ニシキウズガイ (Trochus Shell, Top Shell) 2016年9月、濱嶋撮影

ン近くのCherbourgアボリジニ居住区まで送られた人たちもいた。また、800名のトレス海峡諸島民からなる歩兵大隊（The Torres Strait Light Infantry Battalion）が編成され男性が出征中、女性が子供の養育、島での生存の責任を担うこととなった。諸島民兵士の給料は普通のオーストラリア兵の三分の二という劣悪さであったため、1943年には待遇改善を求めてのストが起るに至ったが、1980年代後半には、このことが再調査され、兵士たちは不足分の手当てを勝ち取った。このことによって、諸島民は、世界情勢を知る機会を持ち、自らの民族の連帯を強める結果ともなった。

4. 現状

第二次世界大戦以来、さらなる変化、発展をトレス海峡諸島は経験することとなるが、諸島民の南下とともに、離島から木曜島への職を求めての移住も始まり、Tamwoyに保留地が設置された。1967年には、国民投票により、トレス海峡諸島民とアボリジニに完全な市民権と各種の権利が与えられ、特に、1970年代後半に起こったオーストラリアと新独立国パプア・ニューギニア間の国境論争が原因となり、諸島民間の政策に対する統一見解がさらに進んだ。1980年代後半には、クイーンズランド州政府は、政策を先住民自身による管理体制へ移行し、様々な問題を調整する諸島民自身による評議会がそれぞれの地域に設置され、事務員、管理者に諸島人を任命し、権限の地方自治体への移譲が開始された。1980年代後半には、それまでクイーンズランド州政府内に設置されていた先住民局が担っていた先住民教育の運営、管理、責任がクイーンズランド州教育省に譲渡された。諸島民の教育熱は高く、若者が将来の社会を形成し、諸島民としての文化、習慣、知識、そして伝統言語を学び自らのアイデンティティに誇りを持ちつつ、医師、弁護士といった専門職に就き各コミュニティの模範となることを目標に掲げている。そのため、高校卒業後に本土のTAFE（Technical and Further Education）、College等の職業技術専門教育機関、大学等に子弟を進学させる家庭も少なくない。現在、トレス海峡諸島民の生活改善、発展を目的とした多くのコミュ

ニティ組織が存在しているが、1984年よりトレス海峡メディア協会は諸島全域へのラジオ放送を開始し、木曜島に本拠を置く The Moa Adai Waiben (TI: Thursday Island)住宅協同組合は住居を供給し、アルコール依存症予防団体である Buai は禁酒運動に取り組み、トレス海峡諸島民の言葉で “We are here.” を意味する IINA は、本土のブリスベン近郊に住む1500人余りの諸島民が抱える問題解決の援助を続けている。また、コミュニティ内の住居、教育、健康などの諸事情改善に関わる独立機構への女性参加も著しく、女性社会事業団体である The Mura Kosker Sorority は、アングリカンチャーチ慈善団体の The Mothers' Union、家庭内暴力や子供の教育問題相談、精神的負担解消、就職斡旋など女性への援助を行う The Torres Strait and Northern Peninsular Area Women's Task Force などとともに活動をしている。諸島民は、Tombstone Opening、伝統的ダンス・音楽の集会、宗教儀式・祝祭への参加や家族の絆の強化などによって独特のアイデンティティ、伝統、文化を現代オーストラリア社会の中で維持し、その活性化に力を注いでいるが、そのような諸島民社会の中でもキリスト教団体の存在は依然として大きい。

5. 家族と血縁関係

諸島民にとって、例えば、パプアソデグロバト (Torres Strait pigeon: Torresian Imperial-Pigeon)、ヤモリ (wanpun) といった動物は家族の象徴として神聖視する動物トーテムであって、彼らに、島内での居場所を与えるなど伝統的生活において大変重要な位置を占めている。また、諸島民は異なる島民同士で結婚したり、他の場所へ移り住んだりして、血縁関係は大変複雑で興味深く、祖先が南太平洋、中国、日本、インドネシア、フィリピン、マレーシア、またはヨーロッパ出身者という場合も珍しくはない。戦前、真珠貝採取のために働いていた日本人潜水夫は、和歌山県、沖縄県出身者が多く、木曜島内の共同墓地に眠る約1000人の潜水夫の墓のうち700以上は日本人の墓で、筆者が今回滞在させていただいたバマガ市長 Newman 氏の母方の

祖母（マレーシア人）の親族も日本人である。さらに、彼の祖父は、アイルランド人で、その間に生まれた彼の母親は、アボリジニ（彼の父親）と結婚し、彼自身の奥さんはトレス海峡諸島民である。この2016年10月には、その日本人親族の木曜島での Tombstone Opening に彼は家族とともに出席したが、筆者は招待されたものの都合がつかずに出席は叶わなかった。

また、諸島民は、歌や踊りで伝統を維持し、かつての戦士時代、物語、宗教、歴史的な出来事、毎日の生活を記憶しているが、Zogo と呼ばれる彼らのパワーは、家族の歴史、伝統的生活様式、サメを意味する Wasikor という太鼓などの宗教的なものの中にも含まれており、キリスト教伝道者たちが布教にやって来る前までは、この Wasikor は、若者たちがある年齢に達した時の儀式にも使われていた。その儀式では、Murray 島の8つの氏族をつなぐ触手を持ったタコとして描写されている Malo と呼ばれる神によって若者の通過儀礼が行われた。しかし、キリスト教の伝来とともにその崇拜もなくなり、儀式も行われなくなった。今日、諸島民の伝統は、前述の Tombstone Opening にも見られるように、“Before Time”⁷⁾ と呼ばれる時にまで遡る古い様式とキリスト教式の新しい様式の混合形式で行われる。また、長老は今日でも最高権力者ではあるが、かつての警察官、裁判官、代弁者としての影響力の多くは、警察、裁判所、政府行政官へと移行していった。このように、ヨーロッパ人の到来とともに彼らの伝統社会は大きく変化した。次の世代にその伝統的文化・慣習を伝えるための様々な努力が続けられており伝統言語の復活・維持はそのための有効な手段の一つとして期待されている⁸⁾。

6. 言語状況

(1) オーストラリア全土

アボリジニ諸言語に関しては、かつて200以上の言語600以上の変種が存在したと言われているが、現在では少なくとも50の言語が消滅し、さらに100以上の言語が危機に瀕している。その原因として、大量殺戮、特別保留地への強制移住などが考えられるが、最も大きな影響を与えたのは、1900年代後半

愛欲

**MR & MRS. EDDIE NEWMAN
+ Family**

You are invited to attend tombstone unveilings for the late:

*Mr Tamyia Nakata
Mrs Clossom Nakata
Mr Jirokichi Nakata
Baby Yoko Nakata
Mr Budden Ahmat*

Date: Saturday 8th October 2016
Time: 8:00 am
Where: Commencing at gravesite of Tamyia Nakata
Feasting: Port Kennedy Hall at 2:00pm

Contact Details
 Toshio Nakata - 0427 866 755
 Yoko Nakata - 0488 006 671
 Buddy Ahmat - 0438 715 462

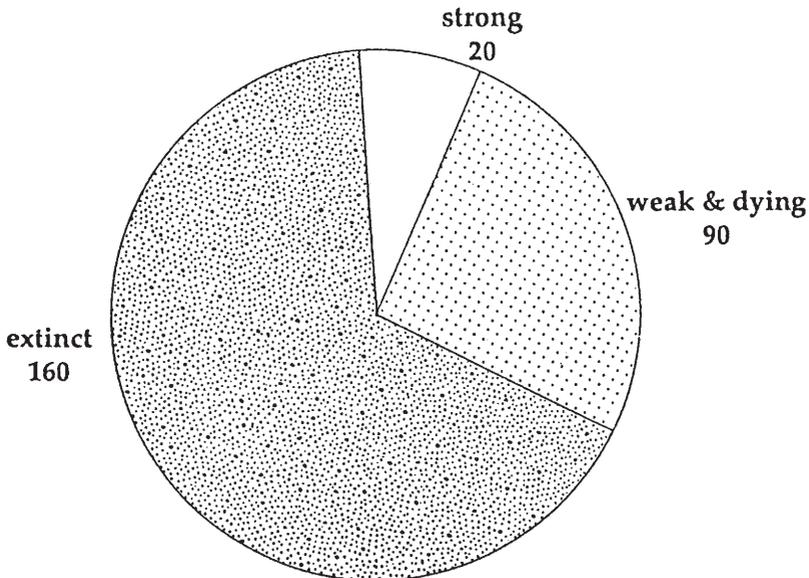
2016/09/04

図3. Newman夫妻への祖母(母方)の日本人親族からのTombstone Opening (Unveiling) 招待状。Nakata (中田 / 仲田) という名前が印刷されているが、現地では Nakachi という発音となる。2017年9月、濱嶋撮影。

までの100年間に取られたアボリジニ女性と白人の間に生まれた子供を強制的に母親から隔離し、施設や白人家庭で育てた同化政策である。隔離された子供の実数は正確にはわからないが、「盗まれた子供たち」(Stolen Children)と呼ばれるこの世代の子供の数は、総人口の三分の一、約8万人と発表している報告もある。また、マッコリー (Macquarie) 大学の調査から、入植時には、言語学的差異が、例えばドイツ語とフランス語と同程度のアボリジニ言語が約200語存在していたが、2000年度では、たった60~70であるという報告もなされている⁹⁾。

表2は、シュミット (Schmidt, Annette, 1990) によるバイタリ度を基準としたアボリジニ諸語の1990年当時の現状であるが、アボリジニ言語学者の中には、消滅 (dead)、消滅しつつある (dying) といった言語が残酷すぎると指摘

表2. Vitality of Aboriginal Languages



出典：The Loss of Australian's Aboriginal Language Heritage (1990)

するものもいる。南オーストラリア州、アデレードにおけるガーナ (Kaurna) 語復興・維持を研究目的とした Kaurna Warra Pintyanthi (KWP) ; Creating Kaurna Language 委員会議長、Amery Rob アデレード大学・人文学部・言語学科教授によると、‘dead’, ‘dying’ のかわりに、‘endangered’, ‘threatened’ といった表現を使用したほうが、人々が興味を持ち、政府からの援助も得やすいと指摘している¹⁰⁾。

(2) クイーンズランド州ヨーク岬北端地域

ヨーク岬北端地域は、インジュヌー、ユマジコ、バマガ、ニュー・マブーン、セイシアの5つのコミュニティからなり、Atambaya 族、Angkamuthi 族、Yadhaykanu 族がインジュヌー・コミュニティに住み、ユマジコには、Princess Charlotte Bay 出身の Bakanambia 族と Jeteneru 族、Lockhart River 出身の Wuthathi 族などのグループが住む。バマガとセイシアには、パプア・ニューギニアの Fly River Delta から南方の方向に位置する Saibai 島からの少数のグループが移住し、ニュー・マブーンには Tjungundji と Port Musgrave 出身のその関連グループが移り住んだ。

まず、インジュヌー・コミュニティ内の Atambaya 語の流ちょうな話し手はすでに存在せず、他の2つの言語、Angkamuthi 語、Yadhaykanu 語とヨーク岬北部の東海岸地域の同族語である Gudang 語の流ちょうな話し手であると自己報告している祖父世代の男性一人が生存のみである。そのため、インジュヌー・コミュニティの人々は、現在コミュニティ内で話されているお互い密接に関連している変種グループを、Injinoo Ikya 語と認めリングフランカとして使用することを選択したが、さらなる目標は、言語復興の取り組みを現在たった一人の話し手しか存在しない危機の状況にある Angkamuthi 語の発展にまで進めることである。また、親世代の中には、危機にあるこれら3語の「半話し手」と見なされるグループも存在するが、彼らが言語復興の中心的な要因となっている。先行研究者として、Crowley, T. (1983) は、そのグラマー・スケッチ、類型学、超言語に関する情報を収集し Injinoo Ikya 語

群をヨーク岬のパマ (Pama) 語と分類しているが、その言語コミュニティは彼が録音した生データに大いに興味を示している。もう一人の先行研究者、Harper, H. (1996) は、Injinooy Ikya 語による賛美歌集や単語一覧表、そして最終的に博士論文の完成にまで至る初期の言語復興の取り組みに携わった¹¹⁾。

7. まとめ

Stiles (1997) は、先住民語復活プログラムの成功例として、ケベック州の先住民クリー (Cree) 族言語復活プログラム、アリゾナ州の先住民ワラパイ (Hualapai) 族言語復興プログラム、ニュージーランドのマオリ語復興プログラム「テ・コハンガ・レオ (Te Kohanga Reo : 言語の巣)、それを模範として始められたハワイ先住民語復興プログラム「プナナ・レオ (Punana Leo : 言語の巣) の4つを挙げている。Stiles はまた、(1) すでに家庭やコミュニティ内の若者には伝えられていなかった、(2) それぞれのプログラムにはプログラムの発展、コミュニティからのサポート、親の参加、政府からの援助がある、(3) それぞれ異なる国に存在している、(4) 死滅危機の状況にある言語復興プログラムの模範となっているといった4つの特徴を選ばれた理由として挙げている。また、教師不足、教師トレーニング、文字・文書教材不足、資金などの共通する問題は存在するものの、落第 (中退) 者数の減少、伝統・アイデンティティ感の強化、公用語 (英語・フランス語) を含む他教科の成績向上などを共通の成果としている。

今回の訪問では、現在流ちょうな話し手が一人も存在しない北部パマ語である Mpakwithi 語の半話し手である Ms Mark (旧姓 Kennedy) Agnes のインタビュー録音に同行したが、このレベルの話し手はニュー・ハプーンに3名とウエイパ (Weipa) に1名の合計4名にまで減少している (これ以上の話し手は存在しない)。ニュー・ハプーンに3名は、Kennedy 姉妹として知られており、彼女たちの祖父が1985年に亡くなるまでこの言語を話していたことを3人はかすかに記憶している。以前の姉妹との話し合いでは、まず彼女たちが

祖父から教わり、それぞれが記憶している歌をもとに歌集を作成することが決められ、2016年6月には、歌詞の書写とともに詩集のCDが完成した。現在は、以前にPama言語センターが録音した簡単な語句の子供用のバイリンガル本を作成するプロジェクトが進んでいる。一方、Injinoo Ikyaに関しては、それを第一言語習得のための言語とすることは長期目標とし、まず、賛美歌集や corroboree（集会の儀式）で歌われる歌 anychirri の歌集を作成することが目前のプロジェクトとされた。そして、2016年4月の復活祭には歌詞のバイリンガル注解付きの2種のCDが完成した。特徴的なことは、プロジェクトを開始する前にはPama言語センターは、かならずそれぞれのコミュニティと会合を持ち、長老をはじめコミュニティ内の同意を得ていることと、それを言語学的専門性からサポートをしていることである。また、Injinoo Ikya コミュニティに見られるように言語復活・維持の動機づけの中心になっているのが、半話し手の父親世代であること、リングフランカとして選択された言語以外の変種はそれぞれの話し手のコミュニティが責任をもって維持するという同意が得られているということなどである。このことから、“Which languages?” というアボリジニ語学習プログラムを悩ませてきた問題の解消も期待される。最後に、日本の状況に関して述べると、2016年3月内閣官房アイヌ総合政策室発表による全国で初めて実施されたアイヌに対する理解度についての意識調査の結果が発表された。それによると、72.1%のアイヌの人が差別、偏見がある、そして19.1%の人がないと回答しているのに対して、日本人への同様の調査では、50.7%の人がない、17.9%の人があるという回答であった。このような日本人とアイヌの人との間の意識の差から、アイヌ総合政策室は、「アイヌ民族との共生社会実現」に向けての学校教育での取り組みを充実させるなどの啓発活動が必要と指摘している。さらに、差別、偏見があると答えた人に原因、背景を尋ねると、「アイヌの歴史に関する理解の不十分さ」という理由にアイヌの人々の78.0%、国民全体の65.0%の人が回答している。また、2015年11月8日の中日新聞（朝刊）には、北海道・千歳空港に掲げられていたプロ野球北海道日本ハムファイターズの巨大バナー広告

にある「北海道は、開拓者の大地だ」との表現に対してアイヌ民族の最大組織「北海道アイヌ協会」側から先住民の権利を害し遺憾であり配慮を求める文書を提出する予定という記事が記載されていたが、同じ中日新聞、2015年11月9日（朝刊）号には、日本ハムファイターズ側が、配慮に欠けていたことを認め謝罪し、巨大バナー広告を撤去するという記事が記載された。単純に、オーストラリアにおける先住民の土地権利問題と比較することは妥当ではないにしても、世界中で共生の必要性が強調されているこの時代に、しかも北海道という地域性からも配慮のない基本的な知識・理解不足であると言えるであろう。このようなことを鑑みて、内閣官房、アイヌ総合政策室の指摘にもあるように、「アイヌ民族との共生社会実現」に向けての学校教育での取り組みの充実が早急に必要であり、先住民問題において失敗、成功を含み多くの取り組みを実践してきたオーストラリアの政策から学ぶことは多いと思われる。

謝辞

今回の調査にあたり、滞在先を提供していただいたバマガ市長 Eddie Newman ご家族、調査録音、資料提供等、多大の協力・助言をいただいたバマ言語センターの Xavier Barker 氏、現地への船・飛行機便手配でお世話になった Robert Sanders ご夫妻、そして訪問を許可いただいたヨーク岬アボリジニ・トレス海峡諸島民コミュニティの皆様がこの書面を借りて改めてお礼申し上げたい。

注

- 1) オーストラリア先住民人口は、2011年度の国勢調査では、総人口2150万人（2006年度に比べて8.3%の増加）中、2.5%（54万人）にあたり、そのうちの90%がアボリジニ、6%がトレス海峡諸島民で、残りの4%が両方の血筋である（Australian Bureau of Statistics 2012, Cultural Diversity in Australia, 2071.0-Reflecting a Nation: Stories from the 2011 Census, 2012-2013）。

- 2) 2000年度の Saibai 島の人口は約350名であるが、1947年、大洪水が海拔の低い全島に多大の被害を与え、その結果、長老の一人 Bamaga Ginau をリーダーとしたトレス海峡諸島民25名が真珠貝採取の小型帆船で島を離れ、オーストラリア本土のヨーク岬、Muttee Heads に移り住んだ。その後、1949年には、さらに250名から300名の島民が岬に移住することになるのであるが、移住者たちは1948年に Red Island Point へ、そして1952年にはさらに新しい移住地へと移り、その最後の新天地をリーダーの長老の名前に因んで、Bamaga と名付けた。そして、かつての移住地である Red Island Point は、さらに小さいコミュニティとなり Seisia という名前となった (*Saibai to Bamaga: the Migration from Saibai to Bamaga on the Cape York Peninsula*, Dana Ober, Joe Sproats, Rick Mitchell)。
- 3) 2016年9月の訪問時は、まず、本土のケアンズから海峡内の Horn 島まで中型機で飛び、そこから小型船で木曜島へ渡り、さらにフェリーで本土のヨーク岬のバマガに入った(ケアンズからフェリーを利用する場合、2日間かかるため島民もこの経路を利用するが多い)。
- 4) 異なる血族や他の島々の血族間の戦いは現在では禁止され、戦士たちが敵の首を狩って縮小させて飾る習慣も廃止されている。伝統的な戦いの踊りは披露されるが、それは極めて平和的なものである。
- 5) Kalaw Lagawa Ya が約3500~4000人の話者、Kalaw Kawaw Ya がヨーク岬のバマガの住民を含めて約1500の話者を有する (Kevin Ford and Dana Ober. 1991. 7 A sketch of Kalaw Kawaw Ya. In Suzanne Romaine. *Language in Australia* (p.118). Cambridge: Cambridge University Press.)。
- 6) 沖縄県南城市のサキタリ洞窟跡で、世界最古となる2万3千年前の釣り針が見つかったが、ニシキウズ貝の底部を割り、石などで加工したものと推測される(朝日新聞、2016年9月20日朝刊)。
- 7) トレス海峡クレオール語で“Before Time”を意味する“Bipotaim”は、単に“Old Times”を意味したり、1967年の国民投票以前の時代を示したりと様々に解釈される (Bipotaim: stories before time| National Museum of Australia)。
- 8) *The Australia Series: The Torres Strait Islanders* (Schmider Joann & Pattie Ian 1989).
- 9) (濱嶋、2002、「少数民族語の維持と復興—オーストラリア・アボリジのバイリンガル教育をめぐる」、河合利光編『オセアニアの現在 持続と変容の民俗誌』、人文書院)。
- 10) Amery Rob へのインタビュー調査 (1993年度、オーストラリア政府・文化財団、豪日交流基金「一般奨励金」による)。

- 11) Pama Language Centre 研究員、Barker Xavier へのインタビュー調査 (2016年9月)。

参考文献

- 1) Amery Rob. 2001. Language Planning and Language Revival. *Current Issues in Language Planning* 2 (2&3): 141-221.
- 2) Amery Rob. 2004. Kurna Language Reclamation and the Formulaic Method. In *Proceedings of Language is Life*, 81-99. The 11th Annual Stabilizing Indigenous Languages Conference. University of California at Berkeley June 10-13, 2004.
- 3) Amery Rob. 2010. Monitoring the use of Kurna. Hobson John, Lowe Kevin, Poetsh Susan and Walsh Michael eds., *RE-AWEKENING LANGUAGES: Theory and practice in the revitalization of Australia's Indigenous languages*, 56-67. Sydney: Sydney University Press.
- 4) Amery Rob. 2014. Reclaiming the Kurna language: a long and lasting collaboration in an urban setting. *Language Documentation & Conservation Vol. 8*, 2014, 409-429. Hawaii: University of Hawaii Press.
- 5) Amery Rob and Buckskin Jack Kanya. 2010. Introduction to the Kurna language 'Strategies' workshop. Presentation transcript: Strategies for Re-Introducing Languages No Longer Spoken to Children and Adults, Session1, In Field 2010 Workshop, 22nd June 2010. Institute on Field Linguistics and Language Documentation, Eugene Oregon. Oregon University.
- 6) 朝日新聞 (2016年9月20日朝刊) 『最古の釣り針沖縄で出土』。
- 7) Blake Barry J. 1991. *Australian Aboriginal Languages: A General Introduction Second Edition*. University of Queensland Press.
- 8) Ford Kevin and Ober Dana. 1991. A sketch of Kalaw Kawaw Ya. In Suzanne Romaine. *Language Australia* (p.118). Cambridge: Cambridge University Press.
- 9) Crystal David. 2000. *Language death*. Cambridge University Press.
- 10) 濱嶋聡 (2002) 「少数民族の維持と復興—オーストラリア・アボリジニのバイリンガル教育をめぐる—」河合利光編『オセアニアの現在—持続と変容の民俗誌』人文書院 pp.210-230。
- 11) 濱嶋聡 (2004) 第9章「オーストラリア」大谷泰照他編『世界の外国語教育政策・日本の外国語政策の再構築にむけて』東信堂 pp.447-466。
- 12) 濱嶋聡 (2009) 「アボリジニ学校におけるバイリンガル教育—アボリジニ社会のテーマ

- と新たな問題」吉村耕治編『現代の東西文化交流の行方Ⅱ—文化的葛藤を緩和する双方向思考』大阪教育図書 pp.407-412。
- 13) 濱嶋聡 (2011) *Literacy Development of Aboriginal Students*, 名古屋外国語大学『現代国際学部紀要』第7号 pp.119-128。
 - 14) 濱嶋聡 (2012) *Indigenous Language Policy in Australia*, 名古屋外国語大学『現代国際学部紀要』第8号 pp.71-80。
 - 15) 濱嶋聡 (2013) 「アボリジニ学校におけるバイリンガル教育」日本言語政策学会『言語政策』第9号 pp.149-160。
 - 16) 濱嶋聡 (2013, 2014) 「アボリジニの学校で①～⑥」『英語教育10～3月号』大修館書店。
 - 17) 濱嶋聡 (2015) 第17章「オーストラリア」大谷泰照編『国際的に見た外国語教員養成』東信堂 pp.245-255。
 - 18) 内閣官房アイヌ総合政策室 (2016年3月)『国民のアイヌに対する理解度についての意識調査』報告書。
 - 19) Schmider Joann & Ian Pattie. 1989. *The Torres Strait Islanders, Australia Today*. Alstonville: Visual Media PTY.LTD.
 - 20) Schmidt Annette. 1990. *The Loss of Aboriginal Language Heritage*, Aboriginal Studies Press, Canberra.
 - 21) Shnukal Anna. 1992. *Broken: An Introduction to the Creole Language of Torres Strait*, Australian National University, Canberra.
 - 22) Stiles, Dawn B. "Four Successful Indigenous Language Programs." In *Teaching Indigenous Languages*, J. Reyhner (ed), 248-262. Hagstaff, AZ: Northern Arizona University.
 - 23) The National Museum of Australia. 2011. *Bipotaim: stories before time*. Show at the National Museum of Australia, Canberra. September 2011 through April 2014.
 - 24) Tsunoda, T. 2013. *Language Endangered and Language Revitalization- An Introduction*. Berlin: De Gruyter Mouton.
 - 25) Thiering, Barbara. 2006. *Jesus the Man: New Interpretation from the Dead Sea Scrolls*, re-issued in paperback with foreword by Barbara Thiering, Simon and Schuster, New York.
 - 26) 中日新聞 (2015年11月8日朝刊)『「北海道は開拓者の大地だ」広告、アイヌ「日ハム配慮を」』。
 - 27) 中日新聞 (2015年11月9日夕刊)『日ハム、広告撤廃へ「アイヌ民族に配慮欠く」』。

- 28) Walsh Michael. 2010. Why language revitalization sometimes works. In Hobson J, Lowe K, Poetsch S and Walsh M (Eds). *RE-AWAKENING LANGUAGES Theory and practice in the revitalization of Australia's Indigenous languages* (pp.22-36). Sydney University Press.
- 29) Yamamoto Akira. 1998. Linguists and endangered language communities: issues and approaches. In K Matsumura (Ed). *Studies in endangered languages* (pp.231-252). International Clearing House for Endangered Languages, Linguistic Studies Vol.1. Tokyo: Hitsuji Syobo.